



# 黒猫劇場



藤野 一花

## 第一幕ヴァイオリニストの少年

---

僕は夢と現実との狭間で漂っているような、妙な感覚のまま、サーカスの曲芸みたいに夜天を回転して居る。僕の身体は軽々と空高く舞い上がっていて、舞台の天蓋からぶら下げられた作り物のような満月に、ぼんやり浮かび上がっている。

けれど、何かが頭に触れた様な気がして、僕はゆっくり眼を開けた。

目の前を木の枝から離れた枯れ葉が、雪の様にひらひらと舞い降りている。側で誰かが枯れ葉を踏む音を立てながら、横切っていった。それを見て、僕は校庭の木の下でいつの間にか眠っていたことに気付いた。

一体、何時間こうしていたのだろうか？

辺りを見渡すと、僕は身体中に枯れ葉をつけた。足も半分以上覆われていた。手を何気なく枯れ葉の中に入れてみると、指先に冷たいものが触れた。

引っ張り出してみると、それは、十ページくらいの冊子とロッカーの銀色の鍵だった。

冊子の表紙にはシネマサーカス団と書かれていて、サーカス団員が宙を舞っている。今朝、学校に来る途中、道化の恰好をした男の子が広場の前で宣伝広告として冊子を配っていたのを思い出した。

「そうか、そのせいであんな夢を見たんだ」

僕はそう呟きながら、茶色のダッフルコートのポケットの中を探った。そこから出て来たのは、今年の誕生日にパパから貰った、懐中時計だ。針は四時少し前を指している。

「大変だ！急がなきゃ」

僕はサーカスの冊子と鍵を掴んで、急いで立ち上がった。そして、体についた枯れ葉を払い除けると、校舎の方へ歩き始めた。

ガチャリ。

ロッカーの鍵を開ける音が暗闇に響いた。

学校のロッカーは利用する人があまり居ないせいか、地下一階にこぢんまりと置かれていた。そこには光が届くこともなく、電気のスイッチも壊れていて暗闇に包まれている。

僕は慣れた手つきでロッカーの中から大きめのケースを取り出した。中身は三年前から習っているヴァイオリンだ。

僕は毎日、学校帰りにヴァイオリンのケースを片手に五時十五分の電車に乗ることになっている。

二つ先の駅まで行くと、ヴァイオリンは勿論、あらゆる楽器を習うことの出来るオルゴールという音楽教室が有る。でも、その決まりごとは二週間前からやぶっている。流石に二週間も風邪で休んでいると、ヴァイオリンの先生も嘘だと気付くらしい。昨夜、先生から電話がかかって来て、僕はママにこっぴどく怒られてしまった。

別に、ヴァイオリンが嫌いな訳じゃない。

いつまで経っても上手に弾けなくて、同時期に習い出した子達がどんどん先に行ってしまうのを見ると、孤独感に襲われてしまうのだ。

でも……、

本当にそうなんだろうか？

僕はいままで何のためにヴァイオリンをやっていたんだろう？

ママに叱られた後、僕は窓辺で夜空をぼんやり眺めながら、そんなことを繰り返し繰り返し、考えていた。けれど、満足のいく答えは浮かんでこなかった。僕は眠気に襲われ夢の中に引きずりこまれるまで、そのことばかり考えていた。

おかげで今日は朝から眠くて堪らない。

僕は人影のない廊下を歩いていた。

薄暗く乾いた空気に、足音だけが響く。

光が漏れているのは職員室だけみたいだ。

廊下の先にぼおっと明るくなっている場所があったので、すぐに分かった。少し開いたドアから、明かりが細長く廊下に伸びている。そこを通り過ぎて、玄関から外へ出た。

学校を出て駅がある大通りに着いた頃には、太陽の代わりに満月が街を照らしていた。けれど、街中には満月以上に目をひくものがあつた。

来月一か月間行われる降誕祭のためのツリーが、今年はずじめて広場に大きくそびえていた。

ツリーの周りには人だかりが出来ていた。子供も大人もツリーに眼を奪われて、動きを止められていた。まるで、チェスボード上の駒みたいに。

そのツリーのせいで、街はたくさんのイルミネーションで溢れている。それはまるで、閉園間際の遊園地みたいで、僕は少しわくわくした。

「もう、ツリーがたってる。今朝通った時は無かったのに」

僕は呟いた。

それでも、お祭り前の騒がしさとか、眩しすぎる電灯とかに書き消されたみたいなの、僕の声は僕にも聞こえないで、何処かに紛れてしまった。

僕は人込みを上手くすり抜け、急いで近道の小径に入った。

赤茶けた煉瓦畳。

その先の入り組んだ狭い路地裏に入る。

半分はたたまれてしまったが、お店の玄関口が至る所で僕に顔を向ける。

花屋、洋菓子屋、酒屋。

そして――、探偵社。

路地裏の先の細い階段の側で人影が見えた。派手なかつらで分かった。

探偵社のアレグロ氏だ。

彼によると、探偵の技量はかつらが全てらしい。そのせいで、毎日見たことの無いかつらを被っては、みんなを驚かせている。

アレグロ氏の家系は代々探偵で、かなり腕利きが揃っている。いまでも遠い町の大金持ちの屋敷

の専属探偵を務めているらしい。

ただ、容姿があまりに浮世離れしているため、みんなからは煙たがられる存在だ。

学校に入る前、僕がアレグロ氏に弟子入りしたいとママに申し出たら、真っ赤な顔をして反対されてしまった。

仕方なく、いまは内緒でアレグロ氏のもとへ通い探偵指南を受けている。

「こんにちは、アレグロ先生」

僕は近くまでかけて行って、挨拶した。

彼は腰まで届きそうなくらい長い、真っ赤なウェーブのかかったかつらを被っていた。

髪の毛の至る所で、華やかな蝶を数匹飼っている。頭の天辺には小さな薔薇色の籠をまるで、王冠を被る様に乗せていた。

「やあ、ヴァージナルくんじゃないか。今日の仕事は上手くいきそうだよ」

彼は名前の通り、早口で言った。

「どうしてですか？」

「見たまえ。今日のかつらを。これまでに無い出来栄えではないか。君もそう思うだろう？」

そう言うと、先生は金色の装飾が眩しい手鏡を素早く取り出し、かつらを確認し始めた。

「かつらなくして探偵業は務まらないと、君も知っているだろう？」

かつらと探偵業。

正直な所、それは先生の早口の聞きづらい喋り方だったり、妙に浮世離れした思考とか、そういうものより遥かに納得しかねる所だ。

ただ、少し前に先生の書斎を掃除していた時に見つけた日記でちょっとだけ理由が分かって来た。それは可哀想に、先生お気に入りの音楽再生機に踏み台にされていた。

日記のタイトルは、「かつらの必要性」

なんとも立派なタイトルだと思った。

それは、一章から三十章まであり、ちょっとした長編小説のようだった。先生に見せると、快く貸してくれたのだが、余りに酷い戯曲調で疲れてしまい、まだ数項しか読んでいない。

ただ、かつらにより危険を免れた、というようなことが書いてあった。

きっと、それが理由なのだろう。

「はい、先生にはじめに教わりました。今日のかつらは、……なんて言ったらいいんでしょう」

僕は先生をじっと見つめた。

「遠慮は無用だ、正直に言いなさい。言いにくい言葉も相手を思えばこそだ。君が私を慕っているならば、尚更ではないか」

先生はそう言うと、さあ、と両手を大袈裟に広げた。

「お父さん、ヴァージナルが困っているじゃないの」

探偵社の扉がギィと音を立てて開いた。

現れたのは、少女だった。

彼女の名はリグロア・アレグロと言う。アレグロ氏の娘だ。

アレグロ氏には十一人の子供がいるのだが、この探偵社にいるのは彼女だけだ。他、十人は立

派に探偵修業を終え、独り立ちを果たしていた。

残るは、今年十三歳になる末娘のリグだけだ。

リグは金色の髪の毛、それでいて短い髪をカールしたような髪型をしている。その上に真っ赤な帽子を乗せていた。

赤と黒の縞のタイツと黒いブーツが印象的だった。

黒い短い上着からは赤いチェックのスカートがのぞいていた。右手にはしっかりとキャリーバックを握っている。

「リグ、どこか出かけるの？」

僕はここぞとばかりに話題を変えた。

「ええ、やっと探偵になれるの。今までヴァージナルと一緒に勉強してきたでしょ。その成果が試されるのよ。今回、ひとりで探偵の大仕事をやり遂げるのが合格の条件なの」

リグはとてもうれしそうに、声を弾ませて言った。

「探偵の試験みたいなものなのかな」

「そう。ヴァージナルも学校とかヴァイオリン教室でやるでしょ」

リグはそう言うと、口を結んで軽く微笑みを浮かべた。それを見て僕は、そうだね、とだけ言った。

同い年くらいの女の子がもう、夢に向かって前進しているというのに、僕は一体何をしているんだらう。

突然、ひとりぼちな気持ちに胸が苦しくなった。

右手のヴァイオリンが余りに重く思えて、目の前の女の子が余りに眩しく思えて、この空気の中で息をするのが苦しかった。

深呼吸した。

「ヴァージナル？ どうしたの？」

リグが心配そうに僕の顔を覗き込む。

それは彼女の癖だ。

恥ずかしいくらいに相手の顔を真っ直ぐ見て、話す子なんだ。

自分に自信の無い僕には、出来ないことかもしれない。

急に翠色の瞳に見つめられて、僕は我に返った。

「うん、大丈夫だよ。昨日、夜更けまで起きていたせいだよ。きっと」

これは本当だった。

「そんなに起きていたの？ 大丈夫？」

「リグロア、ヴァージナルくんは勉強家なのだよ。先日も代々伝わる日記を見せて欲しいと懇願してきたくらいに。大方、それでも読んでいたのだよ」

先生は決め付けて、満足そうに微笑んだ。

「ヴァージナルってば、あの芝居くさい日記読んでるの？ あたし一応読んだけど、仰々しい感じが嫌」

リグはそう耳打ちしながら、悪戯っ子みたいに舌を出した。

それに気付いたのか先生が何かな、と言うと、彼女は楽しそうに無邪気に笑った。

時計塔の鐘が五時を告げた。

「さて、そろそろ時間のようだ。リグロア、準備は万端かい？」

リグは先生の眼を真っ直ぐ見据え、はい、と言った。

その眼には立派にやり遂げる自信と、やはり不安が宿っていた。それを見て取ったのか、先生は娘の肩を抱き寄せると、リグにだけ聞き取れるくらいに小さな声で何かを唱えた。

「じゃあ、行って来ます。先生」

リグはそう言って先生から離れると、キャリーバックを持ち直した。それに先生も頷く。

「ヴァージナルもそろそろ駅に向かう時間だよ」

軽やかな笑顔がこちらに向けられた。

僕はうん、と頷く。

「では、ふたりとも頑張ってきてなさい。私も仕事に向かうとしよう」

そうして、僕たちは駅への道を歩き始めた。

## 第二幕 綺羅星駅

---

ぼくたちはそろって、煉瓦造りの古風な建物に入った。床はカラフルなタイルが張りめぐらされていた。昔、この駅はおもちゃ工場だった、と聞いている。

「ヴァージナル、ここでお別れよ」

リグは駅構内の中央広場で突然立ち止まった。そして、にっこりと笑った。

「え、どうして？」

この駅は町外れ。中心街へ向かう列車しか出ていない。少しは一緒にいられると思っていたのに。ぼくは戸惑った。

「ひさしぶりにヴァージナルと一緒に列車旅行も楽しそうだけれど。もう、ここからは別行動よ」

「そっか、大切な試験だものね」

ぼくは自分に言い聞かせるかのように、頷きながら言った。

そこで、ぼくたちはさよならを言うわけでもなく、急に黙りこくってしまった。

沈黙をやぶったのはリグだった。

「ねえ、ヴァージナル」

リグは得意の相手の顔をのぞきこむような仕草で、ぼくの名前を呼んだ。

「十三才で家の仕事を任されて、いつ戻るかわからない旅に出るあたしは、立派だと思う？」

リグの質問にぼくはすぐ答えることができなかった。何て答えたらいいものか分からなかったからだ。

「ぼくなにかよりも」

つまらない答えだと思った。

「つまらないなあ」

リグが言う。あまりに的確に言われたので、何も言えなかった。ぼくは下を向いてしまった。

「答えじゃなくて、」

彼女は探偵一族に生まれただけあって、頭がいい。いくらぼくが足りない言葉を言っていたとしても、正確に考えを把握してくれる。いまのぼくの心境もどうやら察しているようだった。リグに隠し事はできないな、といつも思う。

「ヴァージナルは、自分を低く見すぎだよ。あたしの家は代々、探偵って決まってる。ほかの何でもなくて、花屋でも仕立屋でも靴屋でも学校の先生でも、踊り子でも作曲家でも。それはね、ヴァージナルがここで蛙になっちゃうより、ありえないんだ」

リグのたとえは何だかメルヘンチックだったけれど、確かなことだ。

「あたしは決まってることやってるだけ。ヴァージナルが毎日、学校に行かなきゃいけないのと同じ」

そこでにっこり笑った。

「でも、ヴァージナルは自由なんだよ。なんでも出来る。あたしは下絵のあるキャンバスみたいなもので、色彩こそ自由。でも、ただ、なぞってるだけなの。綱渡りするみたいに、両足で必死

に線をなぞるだけ。でも、ヴァージナルは真っ白いキャンバスに何を描いてもいいの。それは線をなぞるあたしより、はるかに難しい」

「うん。いま、ぼくはわからないんだ。何を描いたらいいのか。なぞるだけでも、リグは希望に満ち溢れている」

リグはぼくの告白にびっくりしたようだった。顎に手を当てて、真剣な顔で考え込んでいるようだった。

「あたしは、」

リグが声を発した。それにぼくが反応する。

「やっと、綱渡りを決心したの。いままでは綱から降りたくて、ヴァージナルが羨ましかった」

「え、ぼく？」

「そう。なんでも出来るのに、どうしてわざわざこの子は探偵に憧れるんだろう、って。変わってくれたらいいのに、って思ってた」

そうか。だから初めて出会った頃のリグはぼくにとても好戦的だった。

「でも、楽しかったから。ヴァージナルと先生と三人で勉強するの」

そのころのことを思い出したのか、片手を口許にあてて、本当にうれしそうに笑った。その時間はぼくにとっても、貴重なものだった。常に早口で芝居口調の先生の授業はおもしろかったし、リグというともだちが出来た。

「ぼくも同じさ」

「ヴァージナルはさ、いまは好きなことしたらいいんだよ。音楽に興味もつことも素敵だと思う」

そんなリグは、よくぼくのヴァイオリンを何度も触りたがった。先生に怒られるからと、探偵社の屋根裏部屋で。先生には全部お見通しだったけれど。

「ねえ、ヴァージナル。さっき、別れ際、先生あたしになんて言ったと思う？」

さっき。

不安そうなリグを抱きしめた時のことだろうか。ぼくは首をふった。

「どんな結果になろうとも、君にとって、大きな一歩になろう」

成功しなきゃ帰れないのわかってるくせに、と彼女は口をとがらせて、ここには居ない先生を笑った。

「だからさ、ヴァージナルも軽い気持ちで、ね」リグはそうってひとさし指をぴんと立てた。「軽い気持ちでヴァイオリン弾きに行きちゃえ、ってこと。嫌だったら帰ってきちゃえばいいんだし。気持ちのこもっていない音楽ほど、つまらないものはないよ。ママだって、言うときかない子に毒りんご仕込む魔女じゃないでしょ」

ぼくはそこで初めて笑った。

それに安心したのか、リグも微笑む。

彼女は肩から提げられた小さめの鞆から、紙片を取り出しぼくに渡した。



そこには、  
印字でこう書かれていた。

「探偵社グリッグス リグロア・アレグロ」

「これって、」

「仮の名刺。立派に探偵になったわけじゃないけど、仕事するからにはね。蛙にされちゃった時には是非ご依頼くださいませ」

リグはおどけたような仕草と悪戯っぽい表情で言った。

「ありがとう」

ぼくは名刺を受け取り、しばらく眺めていた。リグはそんなぼくの様子を満足そうに見つめていたが、構内の時計を見上げると、そろそろ行かなきゃ、と呟いた。

時計の針は五時十三分を示していた。

「リグ、気を付けてね」

「うん、ありがとう。帰ったら、今度は一緒にどこか行こうね」

そう言うときると体の向きを変えて、ぼくに背を向けた。そうして、軽い足取りで広場を抜け走り去っていった。

### 第三幕 ギタリストの過去

---

駅の中に入り壁にかけられた時計を見ると、五時になったばかりだった。

よかった。まだ、間に合う。僕は胸をなでおろした。僕が時間まで少し休もうと、空いている椅子を探していると、後ろの方から声をかけられた。

「やあ、バージナル。今日もギターのおけいこかい？」

駅員のおじさんがいつものように話しかけてきた。

僕達はいつも色々な話をする。二時間に一回しか電車が来ない田舎の駅だから、駅員さんも乗客も暇なんだ。待ちくたびれて寝てしまった人もいる。その点、僕達は幸せだ。

「おじさん、ギターじゃなくてヴァイオリンだよ。いつも言っているじゃないか」

僕は少し口を尖らせて言った。

「悪い、悪い。昔、ギターを習ってたことがあってな。つい、間違えちゃうんだよ」

おじさんは、照れたように少し白くなりかけた頭をかいた。

「おじさん、ギター習ってたの？ いつ？ 子供の頃に習っていたの？」

「ああ。おれの父親の話はしたか？」

僕は軽く頭を左右に揺らしながら、おじさんのお父さんの話を思い出そうと頑張った。「うん、うん。聞いたよ。とっても厳しくて……。でも、歌は上手いんだよね。だから、コンサートによく連れていってもらったって」

本当は、おじさんに聞いたときはもっと色んなことを教えてもらった気がしたのに。なんだか、半分も覚えてないような気がして、悲しくなった。

「そう、父さんはプロの歌手だったんだ。沢山の人が父さんの歌を聞きにやってくるんだ。すごく、うれしかったな。ステージの上の父さんに向かって、いっぱいの人が拍手するんだ。すると、いつも鬼みtainな顔して怒ってるくせに、その時だけは顔中くしゃくしゃにして笑うんだ。その時だけは、くやしいけど父さんがかっこよかったな」

「それで、ギター始めたの？」

「ああ。ほとんど、父さんに無理やり習いに行かされた感じだったけどな。父さんみたいになりたいって思ってたのも少しあった」僕は少しうらやましかった。そんな理由、今、僕には無かった。ただ、コンクールとか発表会に向けて、理由も分からないで機械の様に連習してるだけ。ママも意味も無く、『練習しなさい』って言ってる気がする。でも、最初からそんなんじや無かったはずだ。

いつからなんだろう？

こんなに、ヴァイオリンが好きだった頃の思い出も、何もかも忘れてしまうくらいに、辛くなったのは。

「でも、無理だった。父さんみたいには、なれなかった」

僕はおじさんがまた話しはじめたので、すぐに、垂れてしまった頭を上げた。

「一回だけ。お前と同じ位の歳の頃だったと思う。町にサーカスがやって来たんだ。友達と一緒に行こうって約束までしてた。でも、父さんはそういうものは嫌いだった。動物が出てきて芸を

見せるとかそういうのは、野蛮だって言うんだ。そんな暇が有るなら、ギターの実習でもしてろ、ってさ。

『父さんが無理やりやらせてるんだろ！ もう、やめるよ』

嘘だった。確かに時々、自分の才能の無さが嫌になった。でも、そんなこと、これっぽっちも思ってなかった。その一回で終わったよ」

「終わった？」

僕は話の裏に、どんな事が隠されていたのか、考えもつかなかった。

「しばらく、父さんは何も言わなかった。でも、俺にむかって言った。

『悪かった』

それだけ言った。しばらくは本当にギターをさわらなくなった。でも、無性に弾きたくなくなつてな。探した。でももう、ギターはおれの前から消えてたんだ」

「消えた？ お父さんが持っていっちゃったのかな」

「……かもな」

おじさんは今どんな気持ちでいるのだろうか。どうして、僕にこんなことまで話すのだろうか。わからなかった。だけど、胸が締めつけられた。僕も本当は昨日、言っちゃったんだ、ママに。もうやだ、やりたくないって。ママは少し悲しそうだった。今日このまま帰ったら、またそんな顔をされそうな気がした。だから、僕は駅で乗りたくもない電車を待っている。

なんて、僕はずるいんだろう。

突然、電車が駅に入って来る音がして、電車を待つ人が一斉に顔を上げた。僕達もそれに続いた。

「少年、電車がお迎えに来たぞ。ほら、行ってこい」

おじさん、僕に迎えなんか来ないよ。だって、やめるって言っちゃったもの。そう言いたかった。

「う、うん」

「なんだ、今日はあんまりやる気ないのか？でも、俺みたいにやめちゃ、駄目だ。好きなんだろ、それ？ ……ヴァイオリンだよな、うん」

自分の言ってることに自分で納得しているのが可笑しかった。でも、「うん」とは言えなかった。電車に乗り込んでシートに座っても、おじさんは窓の外から手を振っていた。僕も負けないくらい大きく、腕を振る。しばらくして、電車は走り出した。